

一二ノ二〇 明治〜第二次大戦終了までの詩歌

解説 平安時代の歌人は笠置寺や笠置山を信仰の対象として、また風流の対象とした。その後、元弘の役の舞台となった笠置山は江戸から明治の世、後醍醐天皇が親政へと一步を踏み出した最初の舞台として、また明治政府の求める天皇への忠臣の理想の姿を楠木正成に見いだして、クローズアップされた。

世の関心がこれに迎合するなか、この時期の歌人も、悲劇の主人公である後醍醐天皇と天皇に忠誠を最後まで貫いた楠木正成を歌い込んだ。

原文

天田愚庵 嘉永七年(1854年)〜明治三七年(1904年)

江戸末期から明治にかけての武士、歌人。漢詩や和歌に優れ、俳人正岡子規と交流。清水次郎長の養子。

大御衣の上にも露のかゝる世は笠置の山のかひもあらなく

(愚庵全集 昭三年)

荒浪煙厓 明治三年(1870年)〜昭和二九年(1954年)

漢詩人

笠置山懐古

岌巖石山雲氣微 想會逆豎犯天威 南風不競勞宸夢 空翠無端濕御衣
関左大軍攀壘急 河陽新將握符歸 登臨淚落劫余寺 老柏含凄对夕暉
(放カン集 大正六年)

伊勢小湊 文政五年(1822年)〜明治一九年(1886年)

漢詩人・歌人。維新後奈良府判事

巨巖壁立独崢嶸 鑾輅無端又北征 天險何如艱態夢 一枝南木是長城

伊藤博文 天保一二年(1841年)〜明治四二年(1909年)

初代内閣総理大臣

壬寅(明治三五年)十一月廿四日過笠置山下有感

兩朝戦迹両間連 南北分流本一流 詩客誰無今昔感 江山随处憶当年

(春畝公詩文録 昭八年)

大久保一翁 文化一四年(1888年) 〔明治二十年(1888年)〕

京都町奉行、大目付、明治政府元老院議員

笠置寺にて 安政二年

かさぎ山雨ふらぬ日もふりし世をしのふなみたに袖そぬれけり

(桜園集 明治二五年)

小野長愿

文化一一年(1814年) 〔明治四三年(1910年)〕

大沼枕山、鱸松塘とともに、明治の三詩人と称された

楠公朝ニ笠置行宮一図

忠純不レ愧武侯倫 一拜ニ龍顔ニ即致レ身 乾坤闔關関ニ出処ニ 可レ待草廬ニ顧人

(京華名勝集卷三)

大和田建樹

安政四年(1857年) 〔明治四三年(1910年)〕

汽笛一声、故郷の空等の作詞

笠置山やまかぜ寒し古のうらみ忘れぬ旅の衣に

(深山桜 明治三二年)

落合直文

文久元年(1861年) 〔明治三六年(1903年)〕

短歌結社浅香社を結成、多くの門人を育成、新派和歌革新運動を推進

書^{ふみ}見ても袖ぞつゆけき笠置山松のしづくにぬれしむかしは

笠置山松のしづくにぬれしよりつひにかわかぬ君が袖かな(藤原藤房卿を)

(萩之家歌集 明治三九年)

海上胤平

文政一二年(1830年) 〔大正五年(1916年)〕

歌人。椎園と号した。加納諸平に国学を学び、のち歌塾を開く。

うき雲は晴むともなし昔思ふ笠置の山はうちしくれつ、

(椎園家集 大正四年)

川田順

明治一五年（1882年）～昭和四一年（1929年）。

歌人、実業家（住友総本社常務理事）。佐佐木信綱門下

笠置山懐古

追手の坂石踏み登れり汗拭きて一の木戸といふ所をとほる
おふて
千よろづの 軍兵どもが揉み合ひし山の砦は石のみぞ残る
つわもの
行宮の笠置の寺の址どころ岩群を負ひて土黒ずめり
かりみや
まさしくも眼もて見るかも兵火の火焰の痕ぞ岩の面に残る
いぐさび ほのほ
岩の面にかぐろに残るいくさびのほのほの痕を今日の日照らす
も
そそり立つこの巨岩に兵火の火焰吹きつけし夜半をしぞ思ふ
おほいは いぐさび ほのほ
いのち知らずの夜討の奴ら獣なす匍ひ登りしかこの谷陰を
笠置やまに今も寺ありその寺のささやかにして鶏頭の花
すべりすべり貝吹岩はよぢがたし靴を脱がむと吾が思はなくに
ぬ
この山にいにしへの事は悲しけれど貝吹岩に滑りて笑ふ
すべ
ここに立ちて吹きし陣貝音の太く反響せりけむ谷に又山に
おと ふと こたま
この岩に立ちて陣貝吹きけらししぬびに聴けば今も反響す
こたま

（旅鷹 昭和一〇年）

笠置山夜討が攀ちしからめての岩かけさむし蔦紅葉かな

（吉野朝の悲歌）

菊池晚香

安政六年（1859年）～大正一二年（1923年）

漢詩に優れた早大教授。人格高潔、脱俗離欲の人と言われる

行宮

金猊骨裂噴ニ殷血ニ 禁城無レ人夜風咽 笠置山深開ニ行宮ニ 絶壁千尋植ニ積鉄ニ 擁
レ麓賊軍鼓撃撃 長繩巨梯肉薄登 風襲雨虐大口折 石破天驚乱雲騰 乘輿播遷迷
草沢 四海之家蔵不レ得 落日人弔雉兔蹊 荒墟万古土花碧
（瀛史百詠）

窪田空穂

明治一〇年（1877年）～昭和四二年（1967年）

歌人、国文学者。自然主義文学に影響され、内省的な心情の機微を詠んだ

木津川を 遡りくれば 笠置山 山の気の澄みて 桜咲き照る

咲く桜 すかし見下ろす 深き谷 木津川長く 濃き藍を引く

(冬日ざし 昭一六年)

紅蘭

文化元年(1804年)～明治一二年(1879年)

詩人柳川星巖夫人。詩人で絵もよくする才女

笠置山下作二首

黄鸝啼老樹如煙 春水渡平笠置川 風袖依微香不断 紫藤花下弄口浚
一簇人家水北涯 鳴鑿迹没草離離 春風吹溼青簑雨 寸寸香魚上釣糸

(紅蘭小集 明四四年)

小杉楹廊

天保五年(1835年)～明治四三年(1910年)

東京大学古典講習科で国文を講じ、文科大学講師。帝室博物館監査掛評議員として古社寺の建築、国宝の調査に従事

御さふらひさすかたしらて笠置山おちしは松の雫のみかは
はれぬるか月は笠置の山松にいさよひそむる五月雨の空

釈宗演

安政六年(1859年)～大正八年(1919年)

臨済宗の僧。初めて欧米に禅を紹介した。門下に鈴木大拙ら。円覚寺派・建長寺派の管長を兼務

過笠置山

普天無処寄斯身 曾使君王淚濕巾 山伯不知建武恨 一蟬啼過半千春

(楞伽漫録卷一五 大正九年)

高浜虚子

明治二七年(1874年)～昭和三四年(1959年)

明治・大正・昭和の日本の俳人・小説家。ホトトギス派

笠置路に 俳描く桃青忌

(高浜虚子六百句)

八月弟貞枝と山城笠置温泉に遊ぶ

木津川の川瀬のかじか聡子夜くればいでゆの窓にも近く鳴くなり

白眞しらますげかさぎをとめは木津川の清き浅瀬を駒ひきてわたる

(歌集山野 昭和五年)

長三洲 天保四年(1833年)～明治二八年(1895年)

漢学者、書家。漢詩、南画家

元弘鳳駕抛茲山 討賊孤軍形勢單 南樹垂枝帝座小 北風煽火行宮殘
中興事業鳥肉乱 遺蹟巉巖竜虎盤 此日經過空弔古 滿峰草木夕陽寒

鳥尾小弥太 弘化四年(1848年)～明治三八年(1905年)

陸軍軍人、政治家。陸軍中将正二位勲一等子爵。禅理に通じ詩書画をよくす

笠置山

笠置山何許 樵者指翠巖 問道直達頂 鬱々老松杉 奇勝曾所聞 山勢真不凡
鬼工通小徑 仙蹤攀巨巖 俯見断崖下 長川掛白帆 登臨吊古客
悽然沾征衫

下笠置川

岸上峰巒走 輕舟激湧湍 水窮山合処 曲折又危難

(得菴叢書 明治貳四年)

永坂石埭 弘化二年(1845年)～大正一三年(1924年)

書家・医師・漢詩人。漢詩界の泰斗。

行宮遺趾草蕭々 夢裏刀兵一劫鎖 豈翅傷心是吉野 笠山風雨弔南朝

松瀬青々 明治二年(1869年)～昭和一二一年(1937年)

俳人。関西俳壇に重きをなした。

笠置にて

山寺や石に鳴なる閑古鳥
山住や我をふるせる閑古鳥
閑古鳥耳無山に鳴にけり
絶頂に盗人臥しぬ閑古鳥
椎か否かこの木古たり閑古鳥

笠置寺にて

青雲や伸び尽くしたる蜀葵

(妻木 明治三七年)

三浦一竿 天保五年(1834年)～明治三三年(1900年)

幕末～明治時代の漢学者

笠置山皇居遺跡

落花啼鳥昼沈沈 物換星移幾古今 涙来尋行在迹 空山草木自簫森

(江渙晚唱集 明治四二年)

与謝野鉄幹 明治六年(1873年)～昭和一〇年(1935年)

明星創刊。妻の晶子とともに明治、大正、昭和を通じて浪漫主義詩歌の中心

われはわすれず笠置山 松のしづくに袖ぬらし ふたり昔をしのびては
齒がみせられし秋の旅

(鉄幹子 明治三四年)

与謝野礼巖 文政六年(1823年)～明治三一年(1898年)

斎藤茂吉は「明治初期に出た特色のある歌人の一人」として高く評価。与謝

野鉄幹の父

明治二十五年の春、(月ヶ瀬の梅見にまかりける路にて)笠置山をよぎりて
拜まろがめばたふとかりけり笠置山くすしき巖ほとけはみな仏にて

(礼巖法師家集 明治四三年)